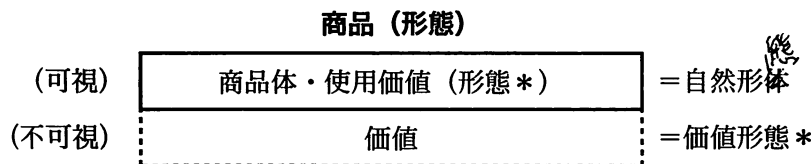


『資本論』 第1巻 第1章 第3節 「価値形態または交換価値」 S.62-64

人文社会系 社会文化研究 修士課程1年 金 志 勲

Pg. 1 商品の二重形態

「使用価値または商品体の形態で」という場合の「形態*」は「商品の二要因」という場合の「要因」であり、これを形態とよぶと混乱を生む。「自然形態」の「形態」も、使用価値=商品体=自然形態であり、「形態*」である。「自然形態と価値形態という二重の形態」というのも、「価値形態*」である。これに対して、本来の「形態」は、「価値実体」に対する「価値形態」である。この「価値形態」は「価値形態*」とは異なるレベルの概念である。(2010年6月25日の討議メモ)



- ・第1章第2節Pg.1をより具体的に説明しているかのように感じるが、上記のような図式は成り立つか。
- ・「価値形態*」とは区分される「価値形態」とは何か。

Pg. 2 商品の価値対象性

- ・「価値対象性」は、関係に先行して成り立っていたものが、「商品と商品との社会的関係においてのみ現れ」るだけなのか。
- ・価値が内在していて、価値対象性が既に成り立っているのであれば、価値対象性が「純粹に社会的なもの」であるとはどういうことか。

Pg. 3 諸商品の価値表現の発展を、貨幣形態に至るまで追跡することの重要性

Pg. 4 最も簡単な価値関係 (一つの商品に対する一つの商品の価値関係) の提示

Pg. 5

Pg. 6-9 商品の相対的価値形態と等価形態

- ・「=」の使い方の問題
- ・第1章第1説 Pg.7に即していうのならば、20エレのリンネルと1着の上着には、第3の共通するもの (=抽象的人間労働) が含まれていることになる。となると、第3節 Pg.8の「しかし、そうはいつでも、……」のところの理屈が理解できない。単なる二つの商品の交換において、なぜ等式を逆にしなければならないのか。